

## 場所としての言葉

### ——ハイデガーの存在のトポロギーによせて——

山本 英輔

#### はじめに

ハイデガーの後期の思索を特徴づける言葉に「存在のトポロギー」というのがある。しかし、これがどのようなものであるかを理解することはそれほど容易ではない。というのもこの「存在のトポロギー」という言葉は、散発的に言われるだけであり、その説明も乏しいからである<sup>1</sup>。言うまでもなく「トポロギー」は一般的には「位相幾何学」を想起させる言葉であるが、ハイデガーのいうトポロギーはそれとは関係がない。数少ない言及のなかで最も端的な規定によれば、存在の本質の在りかを語ることだとされている。

「だが実のところ、思索しつつ詩作することは、存在(Seyn)のトポロギーである。それは存在に、その本質の場所を語る。」(GA13, 84)

ハイデガーがル・トールでのゼミナール(1968年)で自らの思索の道筋を語った発言も、ハイデガー研究ではよく知られている。

「真理についての意味のあらゆる歪曲をさけるために、そして真理が正しさとして了解されてしまうことを排除するために、《存在の真理》は《存在の場所》によって解明された。—真理は存在の場所性として〔解明された〕。このことは、もちろん、場所の場所存在の了解をすでに前提する。それゆえ、存在のトポロギーという表現が〔とられる〕、それは例えば『思索の経験から』において見出される。」(GA15, 335)

「存在の真理」という表現の歪曲をさけるために、「存在の場所」という言葉がとられ、

さらにその場所の場所たるゆえんが思索されなければならない。ここから「トポロジー」という表現が採用されたという。そしてこのル・トールのゼミナールでは、さらに彼の思索の進行為が表明されている。それをかいつまんで語れば、『存在と時間』で捉えようとした存在の「意味」とは、存在の新しい意義を述べようとするのではなく、存在の語を聞くことに開かれようとすることであり、存在が「語る」とはどういうことかという問いが不可避となり、ここから「語への新たな省察」が導かれ、『言葉への途上』につながったと(GA15,345f.)。つまり、存在が「語る」という事態から、言葉についての新たな省察(『言葉への途上』)がなされたというのである。

しかし、言葉への省察は、このような問いの連関から生じたというだけでなく、言葉への省察から、ある重要な思想が生まれているように思える。それは、言葉自体が場所的な性格をもつという考えである。そこで本稿では、『言葉への途上』に見られる後期ハイデガーの言語論を解釈しながら、言葉の場所的な性格を明らかにするとともに、この場所が、人間の本質的な場所を成り立たせるものである点も明確にし、さらに、場所論という問題関心から、ハイデガーのトポロジーの一つの意義を浮かび上がらせてみたい。もちろん、『言葉への途上』の思索だけが存在のトポロジーであると限定することには慎重にならなければならないが、トポロジーという思索に関してこのテキストがきわめて重要であるのは、間違いないであろう。

ところで、「存在の場所」と「言葉」という問題は、『言葉への途上』のなかに収められている、50年代の一連の論考で初めて登場したわけではない。「ヒューマニズムについて」(1947年)のあの有名な箇所を指摘しておかなければならない。

「言葉は、存在の家である。言葉による住まいのうちに、人間は住むのである。思索する者たちと詩作する者たちが、この住まいの番人たちである。」(GA9,313)

ここにすでに言葉の場所的性格が端的に示唆されている。ハイデガーは、この「存在の家」という表現が単純に比喻にすぎないのではないと語っている(GA9,358)。本稿はこのことの含意にも触れてみたい。

## 1. 言葉への問い

『言葉への途上』というテキストは、ハイデガーの言語論が纏まって収められているものと言ってよいのであるが、彼による言語への省察は、言葉を対象化して言葉の客観的分析を行う言語学・言語哲学とは異なる。彼の考察には――すでに初期の言語についての議

論からそうであるが——これまでの言葉観への批判が一貫してある。例えば、講演「言葉」(1950年)において、ハイデガーはこれまでの言葉の特徴づけとして次の三つを挙げている(GA12,12)。すなわち、言葉は「表現」であり、「人間の活動」であり、また「現実的および非現実的なものの表象・描出」である、という理解である。これに、言葉は「記号」であり、「道具」であるという捉え方も加えることができよう。

ハイデガーはこれらの言葉の規定を含めた従来の言語観とその伝統を否定的に捉えるのであるが、この伝統のなかでもフンボルトについては一目置いている。彼によれば、ギリシア以来の言葉についての考察は、フンボルトの言葉の省察において「最高頂」に達し(GA234)、それ以後の言語学および言語哲学を今日にいたるまで規定していると(GA12,235)<sup>2</sup>。そして聴衆にフンボルトを読むことを推奨している。とはいえ、そのフンボルトに関しても、次のような評価を最終的に与える。「フンボルトは、言葉によって人間の主観性において仕上げられた世界の見方の一つの仕方と形式として、言葉を言葉へともたらしめている」(GA12,238)。「フンボルトの言葉への道は、人間をめざす方向を取っているのであって、言葉を通して別のもの、すなわち人類の精神的発展の基礎づけと叙述へといたのである」(ibid.)。「このような観点で把握された言葉の本質は、言葉の本質を示してはいない」(ibid.)といったふうに、言語を形成物(Ergon)としてではなく活動性(Energie)として考えるフンボルトに対しても、それはとりわけ人間の精神の営みとして言葉を捉えるやり方が根本的なネックになるとされ、言葉の本質を捉えるにいたっていないと批判するのである<sup>3</sup>。

ハイデガーが言葉を論じるさいに目標とするのは、「言葉を経験すること(mit der Sprache eine Erfahrung zu machen)」(GA12,149)である。「言葉を経験すること」とは、言葉の要求に従いながら「言葉の要求にことさら我々を関わらせること」(ibid.)であると言う。ハイデガーによれば、そもそも何かを経験することとは、それが我々の身の上に生じる、我々に関わる、我々を襲う、我々を倒し我々を変化させることである(ibid.)。普段言葉というのは、常に我々が話し、聞き、そして書いていて、まさに「使用」しているものであるが、彼の言う経験は、そうした自明なものであるがゆえにやり過ぎてしている言葉についてのある特別な経験と考えられる。だからこそ、そのような経験によって、「我々が変化させられることがありうる」(ibid.)と言うのである。

ハイデガーは、「言葉は語る(die Sprache spricht)」という、奇妙な同語反復的な表現を繰り返す。これはまさに言葉の生き生きとした働きの現事実ということでもあろう。「言葉を熟考することは、何らかの仕方言葉が語ることの中に入り込んでいくことである。何らかの仕方というのは、死すべき者たちの本質に居場所(Aufenthalt)を与えてやるものとし

て、言葉が語るということが生起する(sich ereignen)という仕方である」(GA12,11)。この経験と省察は、「言葉を言葉として言葉へともたらず(die Sprache als die Sprache zur Sprache bringen)」(GA12,230)ことであるとも言われる。「言葉を経験する中で、言葉自身が言葉へともたられるのである」(GA12,151)。こうして、ハイデガーの言語への省察は、言語の理論を構築することではなく、言葉の生きた働き—言うならば言葉のライブ性—を示すことであり、「言葉が語る」という次元へと入りそれを経験することを要諦とする<sup>4</sup>。だがどのようにすれば、そのようなことができるのか。

ハイデガーは、言葉が語るということを、語られたもののなかで探求するのだとし、純粋に語られたものが「詩」であると考え。詩作は言葉の用いられ方の一つというのではない。すでに『芸術作品の根源』(1935/36 年)のなかで、言葉は本質的に詩作であると言われていた。言葉の生きた働きが最も本質的な仕方出来るのが詩——これは必ずしも「ジャンル」という意味ではない——であるというわけである<sup>5</sup>。

## 2. 言葉の本質

### (1) 「名指す」こと

ではハイデガーが言葉の経験で重視する詩においては、何が起きているのか。彼によれば、詩は「名指す(nennen)」という仕方語るのだと言う。

「名指すということは、表示を割り当てることではないし、様々な語を使用することでもなく、語の内に呼ぶ(ruft ins Wort)のである。名指すことは呼ぶのである。呼ぶとは、その呼ばれたものをより近くにもたらす。」(GA12,18)

トラークルの詩「冬の夕べ」では「雪」や「鐘」や「窓」等々が名指されるのだが、名指されることで、それらの物がこちらへと呼ばれる。こちらに呼ばれるといっても現前しているものに加わるわけではない。これを聞いている人がいる空間に出現するわけではない。「呼びかけにおいてともに呼ばれている到来の場所は、不在のうちへと守蔵された現前なのである。このような到来へ来るように、名づけつつの呼びかけは命じるのである」(GA12,19)。あまりに自明のことかもしれないが、物体の意味では「不在」のものをありありと「現前」させることに、言葉の喚起力がある。こうした力を持つがゆえに、言葉は「虚構」を作り上げることができ、「嘘」をつくことができるのである。

ハイデガーは、「名指すこと」は「呼ぶこと」であり、「呼ぶこと」は「命じること」「招待すること」であると一層強く表現する。「命じるとは招待することであり、それは、物が

物として人間に関わるように、物を招待するのである」(ibid. 傍点引用者)。このような働きは「根源的言語行為」とでも言えるのではなからうか。言葉を話すことが「行為」であると看取して分析を試みたのは J.L.オースティンであり言語行為論として広く知られているが<sup>96</sup>、筆者は言葉そのものが根源的に行為的なものであると、ハイデガーの思索から考えてみたい。もっとも、ここでは行為の「主体」は発話者ではなく、言葉となる。呼ばれるものも、それを聞く人間ではなく、物となっている。しかし、言葉を聞く人間が、つねにその呼び声に居合わせる仕方で巻き込まれている。つまり、「人間に関わるように」という先の引用で明らかなように、言葉(語)は人間をして否応なくこの事態に関与させるのである。通常の行為では、行為が完了するとともに、その行為は終わる。(もちろん、その行為が影響として別の行為に連鎖するということはあるが・・・) オースティンのいう言語行為も基本的に——例えば「レポートを出していませんね」(発話媒介行為)と——言い終わった時点で行為は終わる。しかし、言葉が「呼ぶ」あるいは「命じる」ということで見て取れる、言葉の根源的行為は、語が聞かれるたびに、あるいは読まれるたびに、発動すると言える。言葉のもつ本来的な「命じる(Heißen)」働きこそは、「語ること(Sprechen)の本質」(GA12,26)であり、「詩で語られたものの中に、語ることが本質活動しているのである」(ibid.)。そして繰り返すが、行為の「主体」は言葉なのである。

語において、呼ばれるものは「物」である。「名づけることにおいて、名づけられた物は、それらが物となることへと呼ばれてくる」(GA12,19)。そして、物は名指されることによって、物となる。しかし世界と無関係に物が成立するというのではなく、物の成立は世界の成立と「同時的」であると言ってよい。「物は物となりつつ世界を展・開する(ent-falten)」(ibid.)。「物は、物となることによって、世界を孕んで持ちこたえる(austragen)」(ibid.)。「物」と「世界」は横並びに並存しているのではなく、「互いに貫通し合っている」(GA12,22)。ということは、両者は不可分で一体であり、しかしそれでいて区別されているのである。ここでの「世界」は、単なる内面に対する外界ではないし、また『存在と時間』での「環境世界(Umwelt)」でもない。「天空」と「大地」、「神的なもの」と「死すべき者」が相互に映しあいながら成り立つ、後期ハイデガーで馴染みの「四方域(Geviert)」(GA12,19)であり、「世界 - 四方域(das Welt-Geviert)」(GA12,21)のことである。

## (2)言

以上のような言葉の働きをもっと端的に、もっと先鋭化して表すものとして、ハイデガーは「言(Sage)」という語を採用する。「言葉についての対話から」(1953/54 年)では、形而上学的意味で理解され手垢にみちた《Sprache》という語よりも適切な語が見つかった、それが《Sage》である、と言われている(GA12,137)。

では「言(Sage)」とは何であるのか。ハイデガーによれば、《Sagen》《sagan》は《zeigen》、すなわち「示す」ということであり、示すということは、「我々が世界と名指しているものを差し出すこととして、現わしめること、明け開きつつ - 秘匿しつつ、解 - 放すること(erscheinen lassen, lichtend-everbergend frei-geben als dar-reichen dessen, was wir Welt nennen)」(GA12,188)である。《Sagen》とは「世界を示し、現わしめ、明け開きつつ - 秘匿しつつ - 解放しつつ差し出すこと」(GA12,202)である。《Sagen》において、「世界を現せしめるという事態が生じる」(GA12,196)等々と語る。この言(Sage)こそは、「言葉の本質全体(das Sprachwesen im Ganzen)」(GA12,242)を言い当てようとする概念なのである。言は、そうした言葉の本質のことであるから、声を出して話すことと等しいものではない(GA12,241)。口に出して語られるものも、口に出して語られないものも、そこには、《Sagen = Zeigen》が支配していると見るべきである。

示すことは「現前するものを現わしめ、不在のものを現象わしめないようにする(Anwesendes erscheinen, Abwesendes entscheiden läßt)」(GA12,246)。すなわち、言には二面の働きがあるのであり、現前するものをその都度の現前の場に解放して(befreien)、現前させるとともに、現前しないものをその都度の不在の場に閉じ込めて(entfreien)、現前させないでおくのである。「現前させない」というのは、或るものを現前させるということが必然的にその裏面として別の現前しないものの現前を留めて置くことであるとも読めるし、また決して現前しないもの(=Seyn)があるというふうに読めなくもない。ハイデガーはこれについて立ち入って述べていないので判然としないところがあるのだが、いずれにしても、物の現象を可能にしているのが言である。

それゆえ、まさに「語が欠けているところではいかなる物も存在しない」(GA12,154)。「語がはじめて物に存在を作り出す」(ibid.)。それは、物を物的に作り出すのではなく、語は「存在」を「与えるもの(das Gebende)」(GA12,182)である。「どのような存在するものの存在も語のうちに住んでいる」(GA12,156)。一言で言えば、言葉は物があるという事態(存在)を開示するということである。

### (3)道づけ

『言葉への途上』では《Sage》と並んで、ハイデガーが盛んに用いる見慣れない用語がある。それは、《Be-wägung》という言葉である。この語はアレマン - シュヴァーベン方言の《wägen》を基にし、《wägen》は、「道を作る」、「道を作りつつ用意する」(GA12,249)という意味であり、《Be-wägen》とは「〜へいたる道を始めてもたらし、そのようにして道で《ある》こと」(ibid.)であると言う。そこで《Be-wägung》は「道 - づけ」と訳されるわけだが、この言葉の用いられ方は非常に多義的である。ここではできるだけ簡潔に、

その意味するところを押さえてみたい。

ハイデガーによれば、言葉にいたる道は「方域(Gegend)」に属す(GA12,186)。方域とは「解放しつつある明け開け(die freigegebende Lichtung)」(ibid.)である。道-づけは「方域に道を与える」(ibid.)。そして道づける働きは、四方域の四つのものを互いに向き合わせながら親密なものにさせる、すなわち、近づけるのである。それゆえ、道-づけとは、近さの働き、近さそのもの、近みであると言われる(GA12,199f.)。この「近さ」ということについて、ハイデガーは興味深い例をあげる。

「畑を越えて歩いて一時間ほど互いに離れている、二つの孤立した農場があるとする。それらは見事に隣り合っていると言える。これに対して、同じ通りに向かい合っていたり、一体となって建てられている、二つの都会の家は、近隣性を知ることがない。」(GA12,198f.)

これは通常の理解からすれば、心理的な距離の近さであると考えられるであろう。しかしハイデガーはそうには考えない。むしろ、家同士の結びつきの近さであり、あえて言えば、意味の生起である。「近さ」は物理的な距離のことではない。それは、「世界四方域の方域が互いに向かい合うことを道-づけること」(GA12,200)であると言う。四者の違いを保ちながらの結びけるものが「道-づけ」なのである。

ハイデガーが「道」ということに関して、ロゴスとも翻訳される、老子の「タオ」を指示するところなどを見ると、道-づけは、区別し、秩序をつけるという意味が込められている。さらにまた、ここに「動き・運動」(Bewegung)の意味が響いているのは明らかであろう。この力動的な秩序づけは、ただ差異を生み出し区分することではなく、向き合わせ、纏め上げることである。「言は、世界四方域を道-づけるものとして、あらゆるものを、互いに向き合うことの近さへと集約する(versammeln)…」(GA12,203)。ここで言われている「集約する(versammeln)」ということが、言葉の持つ秩序づけの働きを端的に表現していると言ってよいであろう。

### 3. 静けさの響き

このような言葉(言)の集約は、「音もなく(lautlos)」(GA12,203)働くものと言われる。これはどういうことなのか。lautlosは音声の欠如という消極的な事態として受け取るべきではない。そこでまず「静める」という発言に注目する。「安らぎへと守蔵することは静めること(das Stillen)である」(GA12,26)。静めるものは「区-別(Unter-Schied)」である(ibid.)。それは世界と物の根底にある「間」、「中心(Mitte)」(GA12,22)であり、両者の親密さを可能

にする差異のことである。「区 - 別は、物を物として世界のうちへと静める」(GA12,26)。しかもこの区 - 別は二様の仕方で静める。一つは、物を世界の好意のなかで安らがせるという仕方であり、もう一つは、世界を物において満足するようにさせるという仕方である。「区 - 別のこのような二重の静めることにおいて生起する(sich ereignen)のは：静けさ(die Stille)である」(ibid.)。以上のことから、静めるとは、物と世界をそれぞれ固有なものとして納まりをつけるような働きであり、集約の作用の表現したものと読める。それだから、「集約する呼びかけが、響くということである」(GA12,27)と語られるのである。

「言葉は静けさの響きとして語る」(ibid.)。静けさの響きとして語られるものは、何らかの情報ではない。そのようなものとしての意味内容はない。かといって、まったくの「無」でもない。あえてその「内容」を言うならば、ただ端的に「ある」ということ、「ある」という事態になるうか。静けさの響きとは、「本<sup>ヴェーゼン</sup>質の言葉」(GA12,204)であって、これをさらに翻訳して言えば、本質活動する存在の言葉である。それゆえ、静けさの響きなるものは、通常言葉(記号)でないのは言うまでもないが、しかしまた全くの非言語であるというわけでもない。それは人間の語りを促す存在の語りかけであり、斧谷彌守氏の言うように、「音声的に話すことの前駆的狀態」<sup>8</sup>と解するべきであろう。

この静けさの響きに対応する人間の在り様が沈黙である。沈黙は、言の「音なき静けさの響きに応答している(entsprechen)」(GA12,251)。沈黙は、『存在の時間』では良心の呼び声の様態として語られ、また『哲学への寄与』でも存在の真理を問う際のいわば方法的態度として重要視されてきた<sup>9</sup>。『言葉への途上』にきて、沈黙は言の声なき静けさの響きへの応答と言われるのであるが、これは、ただ黙り込むというのではなく、静けさの響きという働きに注意しこれを「聞くこと」であり「受け取ること」である(GA12,29)。しかしまた、そのような密やかな言の働きをできるだけ損なわないかたちで語ることでもあろう。ゲオルグが「語」という詩のなかで語る「語が欠ける(zerbrechen)」というのは、ただ言葉が出てこない、語ることが難しくなるということではなく、静けさの響きに「戻る(zurückkehren)」(GA12,204)ということであり、これこそが「言葉を経験する」ということなのである。

さてハイデガーは、静けさの様相において言を活気づける(regen)ものをさらに語ろうとする。それが、根源的な存在としての「エアアイグニス(Ereignis)」である。「示しとしての言をその示すことにおいて活気づけているところの、提供する固有化は、エルアイグネンと呼ばれる」(GA12,247)。それは、現前するものをそこに現わさせ存続させ、現前しないものをそこから退場させるところの「明け開けの自由な場」(ibid.)を与える。

エアアイグニスと言については、また次のようにも語られる。「エアアイグニスは言



(Sage)の概要を集約し、それを多様な示しの接合構造へと展開する。エアアイグニス、見えざるもののうちで最も見えざるもの、単純なものうちで最も単純なもの、近いもののうちで最も近いもの、遠いもののうちで最も遠いものであり、我々は存在者の中に、死すべき者として生涯滞在するのである」(ibid.)。「エアアイグニスは言が言葉にいたるように道をつくる」(GA12,249)。「示す言としての言葉存在(Sprachwesen als die zeigende Sage)はエアアイグニスに基づく(beruhen)」(GA12,250)。

こうした発言をみると、言のさらに根底にエアアイグニスがあつて、言を動かし展開させるというふうに理解できる。ただし、両者を別箇のものと捉えてはならない。「エアアイグニスの中に根差している言は、示すこととして、エアアイグニスという活動のもつとも固有の仕方であることである。エアアイグニスは語りながらある(Das Ereignis ist sagend)」(GA12,251)。「エアアイグニスは、かの言として支配する」(GA12,185)。つまり、言はエアアイグニスの最も固有な在り方であり、エアアイグニスは、本質的に、言でありつつあり、語りつつあるのである。

このようなエアアイグニス、それに根差して静けさのうちで呼ぶ言、これは言語の深層であると言ってよい。「言葉が語る」という同語反復的な事態は、言わば非人称的な語りであり、そうした次元のものである。ハイデガーは言葉の根源を掘り下げるとともに、それによって言葉を徹底して「脱人間化」していく。行きつく先は、言葉の神秘主義のようにも捉えられるのだが<sup>30</sup>、このような脱人間化された次元の言葉とて、人間の関与を必要とする点に注意しなければならない。

「静けさの響きは人間的なものではない。がしかし、人間的なものはその本質において言葉的なものである。《言葉的 (sprachlich) 》といふ名指された語は、ここでは：言葉が語ることから呼び求められているということ言っている。そのように呼び求められたもの、人間存在は、言葉によってその固有なものへともたらされている。このようにして人間存在は、言葉の本質、静けさの響きに委ねられ続けている。」(GA12,27)

我々人間は言のうちに「帰属する」(GA12,244,245)。その意味では、言は人間より大きなものである。しかしまた静けさの響きは、人間が「話すことを必要とする」(GA12,27)。それゆえ、人間の語りなしには言はその固有の力を発揮しえないのである。こうした人間と言葉(言)との相互関係を含めて、ハイデガーは、言葉の根源的層を示そうとしているのである。それは人間のいないところではない。これを脱神秘化の方向で解するならば、言葉の歴史的集積性と創造性として考えることができるのではないか。我々は言葉を一か

ら作ることはできない。それに帰属するところからはじめて言葉を用いることができるのである。そして我々が言葉を用いなければその言葉は死に絶えてしまう。してみれば、非人称的な言葉の働きには、歴史的集積態として我々という複数性がしみ込んでいるはずである。そうした歴史的集積態に人間が帰属することで、それは維持されるとともに、新たな語り始まりがなされているのである。

#### 4. 場所としての言葉

以上みてきた言葉の深層における根源的な働き、それは人間存在の本質的な場所でもあると、ハイデガーは考える。いわく、「このような仕方では、死すべき者たちは、言葉が語ることのうちに住まうのである」(GA12,30)。「すべては、言葉が語ることのうちに住まうことを学ぶことにある」(ibid.)と。この場所はあくまで、これまで見てきたような、言葉が語るといふ根源的次元であって、記号体系のうちというのではない。

ハイデガーは、「我々が本来すでに滞在していたところ(wo)へと戻っていかねばならない」(GA12,179)と言い、これは宇宙へ出かけるよりもむづかしいという趣旨のことを述べている(ibid.)。この場所へと戻ることが困難なのは、それが人間にとって最も近いものであるがゆえにこそ秘匿的な性格をもっているからであり、さらに加えて、ことさらそこへ戻ることを妨げている状況が成立しているからである。

『言葉への途上』では、「ゲ-シュテル(Ge-stell)の言葉」(GA12,251)という表現が用いられ、今日の我々の言葉、あるいは我々の言葉へのかかわり方が特徴づけられている。「ゲ-シュテル」について詳述することは省略するが、現代の技術の支配する構造のことであり、技術の本質を表すハイデガーの独特の概念である。このテキストでは、いまや言葉が、現前する物の用象可能性へと対応するよう挑発されており、「そのように駆り立てられた話すことは、インフォメーションになる」(GA12,252)と述べられている。言葉はもっぱら情報という意味で捉えられ、いかに早くいかに多く伝達し処理するかが大事なことを考えられている。これは、言うなれば、言葉の経験からの疎外を意味しよう。ハイデガーの言葉への思索は、このような状況から転換、言葉が語る場所への歩み戻りの試みであるとも言える。

「人間存在の場所への歩み戻り(Schritt zurück)は、機械存在への進歩(Fortschritt)とは別のものを求めるのである」(GA12,179)。この「場所(Ortschaft)」は、「我々が死すべき者たちとして住んでいる」「領域(Bereich)」(GA12,255)であって、事物の置かれている物理的空間ではない。しかしそれは人間本質の場所であるから、我々の体験に与えられる「生きられる空間」とも区別したほうがよいであろう。この場所は、上で見たように、物が現れそ

の存在が顕わになる場でもある。『言葉への途上』では「存在の家」という表現についてあらためて言及される。「言葉は、現前の輝きが言の示しに任せられ続けているかぎり、現前を保護するもの(die Hut des Anwesens)である。存在の家が言葉であるというのは、言葉が言としてエアアイグニスの仕方であるからである」(ibid.)。現前は言の示す働きによって成立させられるとともに保護される。その言は、エアアイグニスと一体のものとして働くのである。そしてこの働きは、人間にとって、最も近くて最も見えにくいものである。この言葉(言)は、言葉を音声として発生するとか、文字を読むといった、言語活動とぶつう考えられている場面に限定されるものではない。この点について、「何のための詩人か」(1946年)で次のように語られている。

「言葉は存在の家であるがゆえに、我々が存在者へと到達するのは、我々が不断にこの家を通り抜けることによってである。我々が泉へゆき、森を通り抜けるとき、我々はつねにすでに《泉》という語、《森》という語を通してゆく。たとえこれらの語を発せず、言語的なものを考えなくても、である。」(GA5,310)

言葉がこのような潜在的で場所的性格であるという発言を読むと、とりわけ後期以降に中心概念として語られる「明け開け(Lichtung)」あるいは「現(Da)」のことを思わざるをえない。言は「明け開けの自由な場をくまなく支配している(durchwalten)」(GA12,246)とハイデガーが述べているところがある。これはテキストにおいては目立たないけれども重要である。明け開けは言としての言葉とともにある。明け開けは言の働きなしには成り立たない。明け開けは単なる視界の開けのようなものではなく、徹底的に言葉に貫かれている。その意味において、言としての言葉は場所なのである。と同時に、U.グッツオーニが述べているように、「空間的な生起」はそれ自身「言葉の生起」なのである<sup>14</sup>。場所としての言葉は種別的に区別された、いわゆる「言語空間」というものではなく、場所の場所たるゆえんのもの、「あらゆる場所の場所(Ortschaft aller Orte)」(ibid.)だと解することができるのである。

存在のトポロジーとしての思索は、存在が語るということから言葉の本質を問うことへ展開したのだが、この言葉への省察は、広く場所論という観点からすれば、そもそも場所というものに関して、身体を基軸に考察するのではなく、言葉の本質を問いつつ、場所を「言葉」として考えるという方向とその可能性を開いていると言えるであろう。

(金沢大学人間社会学域学校教育学類教授)

## 注

ハイデガー全集からの引用は、GA と記し、この略号に続くアラビア数字は巻数を、コンマに続くアラビア数字は頁数を表わす。

- 1 トポロギーについての発言自身が乏しいながらも、重要なものとして注目されてきたことには、O.ペゲラーのハイデガー論の影響が大きい。Otto Pöggeler, *Der Denkweg Martin Heideggers*, Pfullingen: Günther Neske 1963. (大橋良介・溝口宏平訳『ハイデッガーの根本問題—ハイデッガーの思惟の道』晃洋書房) *Philosophie und Politik bei Heidegger*, Freiburg/München: Karl Alber 1972. E.ケッテリングはペゲラーの功績を認めつつ、存在のトポロギーの意味合いを、①存在の場所化、②明け開けあるいは近さを見出すこと、③存在の歴史的刻印、明け開け、エアアイグニスに関わることという、三点に纏めている。Kettering, Emil, *NÄHE Das Denken Martin Heideggers*, Pfullingen: Günther Neske 1987. (川原栄峰監訳『近さ ハイデッガーの思惟』理想社) わが国では、川原栄峰がハイデガーの思想全体を住居説(トポトギー)として解釈したのも大きな功績である。川原栄峰『ハイデッガーの思惟』(理想社) 1981 年。近年の研究で筆者が注目したいのは、J.マルパスである。マルパスも、ハイデガーの思想全体を存在の場所の分節化の試みとして解釈し、しかも広く場所論という観点からハイデガー以外の様々な思想や議論をからめながら、考察を行っている。Jeff Malpas, *Heidegger's Topology Being, Place, World*, MIT Press, 2006.
- 2 このことについて J.トラバントは、フンボルトの影響が「1950 年代におけるハイデガーの発言に至るまで微弱なものであった」と述べている。ユルゲン・トラバント『フンボルトの言語思想』村井則夫訳、平凡社、187 頁。
- 3 フンボルトおよびドイツ人文主義の言語論とハイデガーの言語論とを綿密に突き合わせ、同時にハイデガーの言語論を批判的に吟味した次の論考は貴重であり、大いに参考になる。村井則夫『解体と遊行 ハイデガーと形而上学の歴史』第 6 章「媒介と差異——ドイツ人文主義とハイデガーの言語論」知泉書館、2014 年。
- 4 このような試みであるがゆえに、テキストは難解であり概念も多義的であり、ハイデガーの言語についての理論を理路整然と整理することは困難である。
- 5 『言葉への途上』では、ハイデガーが詩人のなかの詩人と考えるヘルダーリンではあえてなく、トラークルやゲオルグが選ばれているのが特徴的である。
- 6 J.L.オースティン『言語と行為』坂本百大訳、大修館書店、1978 年。
- 7 W.マルクスは、剴切にも、後期ハイデガーで考えられている言葉とは、「アレーティア構造の《分節化》」であると言っている。On *Heidegger and Language*, ed. by Joseph J. Kockelmans, Northwestern University Press, 1972, p.251.
- 8 斧谷獺守「立ち出でることとしてのピュシス——ハイデガーにおける言葉の在処——」西川富雄編『自然とその根源力』(ドイツ観念論とその対話 [2]) ミネルヴァ書房、1993 年、206 頁。
- 9 ペゲラーは、存在の声に応答しようとする哲学の語りが命題的な語りとは別のもの、あるいはそれ以上のものであって、それが沈黙であると言い、またその哲学の独特の「論理学」が「ジゲティーク(黙

示学)」となるのであると解している。Otto Pöggeler, *Philosophie und Politik bei Heidegger*, Freiburg/München:Karl Alber 1972,S.78f.

- <sup>10</sup> 「言葉が語る」という言葉の神秘主義のようにもみえる事態を——ハイデガーの思索の歪曲を恐れずに——我々の通常の経験に引きつけてみるならば、次のように解することもできよう。すなわち、我々は、言葉を語るとき、こう語ろうという意図や意志に基づいて語ろうとするのであるが、しかし語り始めると、そうした意図や意志から微妙に、あるいは微かにはみ出すものを感じることがある。そして言葉が言葉をうけて、みずから動き出すようなことがあるのではないだろうか。我々は馬の手綱をひくように、それをコントロールしようとする。馬と御者が対話をしているように、言葉と話者はつねに対話をしているのである。このような言葉の使い方なども含めて、言葉を確かめながら、あるいは、言いたいことはこれではないとか、うまく言えそうとか、そんなふうに言葉に応答しているわけである。文章を書く場合にも、書き始めはなかなか言葉がうまく出てこないのに、ひとたび書き始めると筆が進むということがある。そのとき、何か波に乗るような感覚を持つのではないか。この言葉の生まれ出てくる動きを、ハイデガーは言わんとしていると解すればどうであろう。

- <sup>11</sup> Ute Guzzoni, *Der andere Heidegger Überlegungen zu seinem späteren Denken*, Freiburg/München:Karl Alber 2009,S.157.